

禅讓論の成立

大久保 秀 造

今回取り扱う禅讓論とは中国の王朝交代に欠かせないもので、なぜ旧王朝は滅び新王朝となったかを古の事跡を鑑み、当代の情勢と比肩し交代の理由付けをするために編み出されたと私は考える。王朝交代の禅讓は王莽に始まり漢魏にて完成した。そこで禅讓が完成した漢魏交代に着目した。交代の流れ、どんな引用がされたかを考察する。

漢魏交代の特徴に曹親子二代で実行された点がある。三国志等史料には、建安一八年五月に曹操は魏公の位を得た。

五月、丙申、以冀州十郡封曹操為魏公、以丞相領冀州牧如故。又加九錫；（下略）

彼は漢の丞相で、前年に「蕭何の故事」という栄誉な扱いを受ける。また「九錫」を与える旨があり彼が強大な権勢を持つていると判る。二一年五月に魏王へ進み、烏丸匈奴の帰順を受ける。

夏五月、天子進公爵為魏王。代郡烏丸行单于普富盧與其侯王来朝。

（中略）秋七月、匈奴南单于呼厨泉將其名王来朝、待以客礼、遂留魏、使右賢王去卑監其國。

主「漢」より補佐「魏」の力が強い事が判る。これは古の政治体系に近く、上博楚簡「容成氏」でも明らかである。また彼は魏書注等で帝位を望まないとする。彼は「王莽の禅讓」を改善し、待望される皇帝即位のため前例伝承を研究していたと推察される。彼の没後曹丕が後継し、数カ月後に漢魏交代となる。続いて禅讓儀式・経過をみる。曹丕が献帝・臣下から讓位を打診・勸進され、即位儀礼を完了するまで、禅讓の最終工程とする。三国志等は、曹丕が後継して以後、様々な事象を経て十月に禅

讓儀礼が実行される。

左中郎將李伏、太史丞許芝表言「魏當代漢、見於圖緯、其事衆甚。

羣臣因上表勸王順天人之望、王不許。冬、十月、乙卯、漢帝告祠高廟、使行御史大夫張音持節奉璽綬詔册、禅位于魏。王三上書辞讓、乃為壇於繁陽、辛未升壇受璽綬、即皇帝位、燎祭天地、嶽瀆、改元、大赦。

詳細は三国志文帝紀注の禅代衆事に譲るが、要約すると臣下の一人が禅位を勸進し群臣も同意するも王は断る、再度別の臣下が勸進し群臣も勸めるが王は故事道義により断る。漢帝が禅代詔を出し群臣が勸めるも断る。これより勸進・拒絶・詔が繰り返され、三度の繰り返した後に王が禅位を承諾、册詔を受け日取りを決め、璽綬を拜して皇帝位に就く。同注の魏氏春秋も儀礼を通して「堯舜の事を知れた」とする。

先学はその内容に堯舜の故事・記述（唐虞之道）の引用を指摘、孫氏は即位の禅讓文・告天文に着目、それに論語堯曰の部分の引用を指摘する。古橋氏は経書解釈について論じ、皇帝璽綬の受領・告天と尚書の記述を対比する。璽綬の受領し皇帝位に就き、翌日の告天燎祭をし即位を報告、天子となる構図は先学がほぼ見解を同じくする。自称天子でなく、天の認可を得る形である。天子即位では、百官だけでなく諸国の人々が列席するのも重要で皇帝は国内実務、天子は天地祭祀及び国外の慰撫徳化の役割を持つという区分を考えるべきで、告天文で「皇帝臣某」なのは、告天時には天子でないと推察する。尚書の記述引用は正月の祭祀の様子で、告天文に同意箇所がある。古橋・渡邊両氏は魏公卿上尊号奏を挙げる。それには文頭が尚書、中盤で論語堯典を用いる。曹魏を舜の末裔とし、禅代衆事にも辛酉の上奏にある。これらから漢魏交代は堯舜に倣っていると見える。

今回漢魏交代の流れ、用いられた故事や記述を考察した。曹父子により行われた交代は理想の体現で、皇帝（天子）即位の道筋は①政戦での功績②爵位獲得③皇帝代理者の立場④瑞祥報告⑤臣下の勸進や禅位通達

と謙遜拒絶（複数回）⑥冊と璽綬受諾、告天燎祭と確認した。堯舜故事を中心に経書を絡め、怪しさの排除で篡奪のイメージを無くし、禪讓論の完成・成立をみたのである。

参考文献【敬称略】

- ・渡邊義浩『後漢における「儒教国家」の成立』（汲古書院、二〇〇九）
- ・宮川尚志『六朝史研究 政治・社会篇』（平楽寺書店、一九九二）
- ・古橋紀宏「後漢・魏・晋時代における堯舜禪讓に関する経書解釈について」（後漢経学研究会論集、二〇〇五）
- ・孫險峰「皇帝即位の禪讓文——三国・晋・南北朝における経学の一側面——」（筑波中国文化論叢、二〇〇七）
- ・松浦千春「禪讓儀礼試論——漢魏禪讓儀式の再検討——」（一関工業高等学校研究紀要、二〇〇五）
- ・浅野裕一「上博楚簡『容成氏』における禪讓と放伐」・李承律「上海博楚簡『容成氏』の堯舜禹禪讓の歴史」（中国研究集刊、二〇〇四）

（大学院文学研究科史学専攻博士後期課程）